

&lt;特集&gt;

**天邪鬼日記**

大辻民樹 &lt;放送作家&gt;

**「エス」と「ポチ」**

早朝、散歩をするようになった。

もともと慢性腎不全で2日に一度人工透析を受ける体に、軽度の糖尿病が加わったと云うのだから、ズボラな天邪鬼も渋々立ち上がったのだ。命を失うことにはそれ程執着はないが、苦しいことや痛みには極端に弱い。糖尿病のせいで足を切断したり、盲目になってはかなわない。その進行を止めるのに必要なのはやはり適度な運動だ。で、歩き出した。

コースは、親水公園と呼ばれる細長い川沿い。距離は2キロほど。川か運河であった所を埋め立て、そこに新たに人工の小川を造り、その周囲を遊歩道にしたものだ。

もともとは、墨田区の海拔0メートル地帯の洪水対策だったらしいが、岩の崖から進む人工の滝から始まる水流は、澱んだり走ったり…さらにその周囲には紅葉や桜等、四季折々の日本の風景が楽しめるようになっている。まあ、よくできている。

とは云え、所詮人工…偽物の自然と思っていたのだが散歩をはじめると、なかなか馬鹿にしたものではないことに気づく。天邪鬼としては、このような人工の、しかも区営の公園など文句のつけたいところだが、いやいや文句どころか脱帽である。

冬場のこの季節、散歩をはじめてまず最初に気づくのが、カモ類の多いこと。2キロの小川の至るところでカモたちが小さな群れをつくりながら、何羽も浮いている。残念なことに人工の小川、さすがに魚は育っていない。だが、完成から20年以上、川の中には藻や苔、水草が育っているのだろう。カモたちはそれを食べているようだ。時折、水底に向けて顔から潜っている。葦の繁る脇のほうには、たいてい1羽か2羽の大型のサギがいる。魚は育っていないが、カエルやトンボなどの虫たちは定着して繁殖している。

サギはそれを目指してやってくるのだろう。ごくごくたまに、色鮮やかなカワセミを見ることもある。田舎育ちの天邪鬼がまさか東京の下町でカワセミをはじめて見ることになるとは…。20年以上前、おそらく私のような天邪鬼に批難を浴びながらも、この親水公園の計画を押し進めた墨田区の官吏たちに敬意を表する。

鳥たちに次いでよく見かけるのが、野良猫たち。いや、立てられた看板によると、彼らは野良猫ではなく「地域猫」と呼ぶらしい。地域の住民の理解の元、去勢手術をしたりボランティアによる餌やりをしているのだと云う。最終的には、飼い主を見つけたりすることで、野良猫をなくすことを目標としているらしい。天邪鬼としては野良猫くらいいても別にそれ程の悪さをすることもないだろうと思うのだが、猫好きと同じくらい猫嫌いとも云う人も増えているらしい。まったく、1かゼロか、最近は極端に走ることが多いようだ。まあ、適当でいいんじゃないなんて云う天邪鬼の意見など、額に青筋立てて一瞬で撃退されてしまう。

さてさて、親水公園で見かける動物たち、実は最も多いのは、人間と犬たちだ。柴犬にテリア、何かモワモワの毛に覆われた超大型犬とか、休日にはもう親水公園一帯は犬の展示会のようなになる。人間たちはみんな片手にビニール袋やらを持ち、お犬様が便意を催されてしゃがみ込むと、その後ろに回り、お行儀よく、その排泄物を回収していらっしゃる。この国の人はいつからこんなに綺麗好きになったのであろうか。今は知らないが、パリやバルセロナでは、街に見とれて足下を疎かにして歩いてなどいたら、とんでもないことになる。道の至る所に、犬たちの散歩のお土産が転がっているのだ。

かくいう私も去年までは、愛すべき相棒とこの親水公園によくやってきて、相棒の尻を見ながら「どうしてお前の糞を立派な大人の私が取らなければならないのか」と、屈辱と面倒臭さに苛まれながら、屈んでいたものだ。ああ、思い出してしまった。

ビーグルのポチ…いつも申し訳なさそうな眼差しで、尻尾を振りながら私を見上げていた相棒。彼が、16年と云う天寿を全うしたのは、去年の初夏のことだった。

実に可愛く、従順で寂しがり屋の相棒だった。イギリスのどこそかで生まれたビーグルの何代目かと云う血統書を持った彼をペットショップで見つけたのは、3番目の娘が生まれて少し経った頃、まだ離婚もせず、仕事も順調で、港区に建てた一軒家に住んでいた頃だ。

私は、それからとんでもない転落人生を送るのだが、ま、それは別の話。

子どもの頃から、犬、猫を飼っていた私は、3人の娘たちにも是非とも動物と交流を持ってほしく、20万円の値札のついた檻の中で申し訳なさそうな顔をして私を見上げていた子犬を一発で購入。上のお姉ちゃんたちが、レオとかマロンとかオスカルとか云う中を、「ウルサイ、犬は古来よりこの国では、ポチかエスカペロだ。それが嫌ならクマゴローだ！」と突っぱね、涙目のお姉ちゃんたちを尻目に目出度くポチと命名した。ポチと暮らしながら痛烈に感じたのは、子どもの頃飼っていた雑種のエスとの違いであった。では、今から50年ほど前、昭和40年代から50年代にちょっとタイムスリップ。老いた天邪鬼がまだ小学生の頃だ。

まず、ペットショップは、東京や大阪・京都などよほどの大都市にしかなかった気がする。

私の住んでいた関西の田舎、と云っても東海道本線最寄であり、歩いて20分ほどの駅に行けば、京都・大阪にも東京にも繋がっていた。

まあ、一步外に出れば田園風景が広がるのだが、ポルノばかりの上映であったが映画館もあったし、駅前には二軒ほど喫茶店もあった。つまり、それ程のド田舎ではなかった私の故郷でも、ペットショップはなかった。なかったどころか、ペットショップと云うものがあると云う知識も小学生の私にはなかった。とは云え、多くの家で犬や猫は飼っていた。

彼らをどこから手に入れていたのか？ 基本は、友人知人の家で生まれた子をもらい受けるか、無理やり押し付けられるかだ。もう一つの典型は、拾ってくること。私の場合だ。学校の帰り道、川沿いの草むらで「キューン、キューン」と何やら声がする。見ると、小さな木の箱に入れられた子犬が3匹、身を寄せ合って鳴いている。恐る恐る手を出せばペロペロ舐める。

抱え上げれば縋りつくように温かく、だがあまりに軽いその身を摺り寄せて来る。

ここで、小学生男子の頭脳は高速で回転する。この可愛い子犬をこの儘捨て置けば確実に死ぬだろう。だが、怒ると恐ろしいあの父と母がこれを飼うことを許してくれるだろうか。犬を飼うと云うことはなかなか面倒な仕事が増える。犬小屋も作らなければならないし、毎日餌もあげなければならない。うるさく吠えたりしたら、父親は激怒するだろう。さあ、どうする？

いろいろ考えながらも私はその箱を抱え上げ、とぼとぼ歩きだす。同情と憐れみと勇気と可愛さ…、あの時の家までの思いは今も忘れられない。

「あらあらどうするの？ 飼うか飼わへんかはお父さん帰ってきてからやな。どっちにしろ3匹いっぺんは無理やで」、母がとりあえず冷蔵庫にあった牛乳を平たいお皿にあげながら云う。で、裏庭に置かれた子犬の箱の隣で私は必死で牛乳を飲む子犬たちを眺め、彼らのお腹が膨れると撫でたり抱いたり、時を忘れて夢中で子犬の相手をした。で、父が帰ってくる。

「ほお、犬か。ちゃんと世話できるか？お前が面倒見るんやぞ。ホラ、好きなもの選べ。エ？アホか！3匹もいっぺんに飼えるわけないやろ！」ここで怒らしては元も子もない。

私は、一番元気のない1匹を選び、残りの2匹を再び箱に入れ、来た道を大泣きしながら戻る。既に日は暮れている。目を瞑って元あった場所に子犬たちを捨てると、私はついてこないように、必死で駆け戻った。後ろから聞こえてくる「キューンキューン」がいつまでも追いかけてくるようだった。ウチに帰ると、私は残された1匹を抱きしめながらいつまでも泣いた。

これがエスとの出会いだった。

全身茶色の短毛、いまで云うと柴犬ほどのエスは、当然雑種である。当時、一軒家の多くで犬を飼っていたがその多くが雑種であった。ま、犬種わかる犬なんて殆どいなかった。が、そうだ。真っ白なスピッツは結構いた。こいつがキャンキャン吠えて実にうるさいのだ。あとは稀に土佐犬とか、コリーとか…、今、親水公園を闊歩する犬たちは、当時の私にとってすべ

てが図鑑の中の存在であった。飼うのは、玄関横の犬小屋に鎖…、そう、今のようなリードと云うものではなく、金物屋に売っていた犬用の正に頑丈な鎖で犬は繋がれていた。長さは1メートル半ほど、散歩に連れて行かない家では、その範囲が彼の全世界となる。

ウチは玄関前が狭かったため、幸いにもエスは塀に囲まれた裏庭…、親爺が茄子やら大根やら育てていた畑で放し飼いしていた。当時、基本、犬は外であった。小金持ちの未亡人、ま、おばあさんが、狎（チン）を家の中で飼っていることは稀にあった。所謂、座敷犬だ。ウ〜ン、座敷犬…、この言葉も令和の世には死語になるだろう。

何故、基本、犬は外で飼われたのか？ 何故なら、彼らにも役割があったから。つまり彼らは家族同様のペットではなく、番犬であった。餌を与えられる限り、その分の労働を要求されたのだ。犬は番犬、猫は鼠防止。従って当時の犬はよく吠えた。愛想のいい犬なんて役に立たないとされたのだ。と、すれば平成の世、ウチで飼われたポチは失格であった。彼は決して吠えることなく、誰にでもなついた。もし、ウチに泥棒が入ったとして、全く役に立たない。

いや、ひょっとすると泥棒が撤退しようとした時、犯行は発覚したかもしれない。ポチは、おそらく犯行中の泥棒の足下でなつき、そして彼が帰ろうとすると、「エ？もう帰るの？もっと遊んで」と、鳴くからだ。ポチは、まあ血統書付き純粋なビーグルであったが、その能力においては私は少々疑問を抱いている。

ポチは時折脱走した。そして、港区にいる頃は、渋谷警察に二度、墨田区に来てからは浅草警察に一度、連行されている。迎えに行くと、得意の縋り付くような目で婦警さんたちに甘えたのであろう。お腹パンパンにして尻尾を振ったものだ。ポチを連れてウチに帰りながら、「お前は どうして一人で帰ってこれないんだ？」と、呆れて声をかけたものだ。家の中で餌を投げてもなかなか見つけられない。ポチだけかも知れないが、どうやら臭覚と聴覚は、純血種ポチより色んな血が混じったハイブリッド、雑種エスの方に分があったようだ。

エスは、凄かった。母によると、エスが落ち着きがなくなって尻尾を振って走り回り始めて20分すると、いつも私が学校から帰ってきたと云う。信じられないが、およそ1キロ以上離れた小学校から下校する私を臭覚か嗅覚かで察知していたことになる。親爺が10キロは離れている河原に原付で釣りに行って、ついていったエスをその儘放って帰ってきた時も、2、3日してボロボロになりながらもエスは帰ってきた。

あの時、玄関の戸を前足でガリガリ引っかく音に気付いて、私が戸を開けると、エスは実に嬉しそうな顔をした。いや、あの時、確かにエスは本当に嬉しそうな顔をした。

ただ、16年生きたポチに比べ、エスは10年も生きなかったと記憶する。常に残り物のぶっかけ飯をガシガシ食らっていたエスに比べ、ポチは子犬から老犬へ年齢相応のドッグフードを与えられ、エアコンの利いた部屋で冬も夏も過ごし毎日のように散歩に連れて行ってもらい、

2週間に一度はペットサロンでトリミングとシャンプーをしてもらい、病気となれば保険がきかず毎回1万円札が一枚か数枚飛んで行った獣医で診察してもらい、天寿を全うするとペット霊園に埋葬された。一方、エスはとにかく放りっぱなし。雪が降れば半分埋まりながら狂ったように庭中駆けずり回り、夏はベロを出し日陰を見つけひたすら寝ていた。

勿論、獣医などなかったし、調子が悪ければその辺の雑草を噛んでいた。散歩は私の気分次第。記憶する限り、エスを洗ったなんてことはない。あまりの暑さにホースで水をぶっかけたことはあったが…。朝、気が付くと畑で動かなくなっていたエスは、親爺と私とで先祖代々の墓場に運び、その片隅の草むらを掘り返し埋めた。

さて、ここで私は思うのである。エスとポチ、果たしてどちらが幸せだったのであろうか？まるで家族の一員のように可愛がってもらったポチ、殆どかまってもらえず、だが、一日の大半を自由に駆け回っていたエス…。どちらも人間に飼われたと云うことで、不幸でもあり幸福でもあったのだろう。ただ、私の思いとしては、私自身が子どもであった時代と、父になった時代の違いということもあろうが、エスは同志、家族の一員といった感覚、ポチはペット、可愛がるための扶養家族と云う認識があったような気がする。

どちらがいいかと云う思いはないが、昭和と平成・令和の子供たちの差と共通するような気がする。とにかく放っておかれた昭和の子どもたちに比べ、最近の子どもたちは大事に大事に育てられる。運動会からは、危険だからと棒倒しや騎馬戦、組体操が消え、忙しくて来れない親もいるし、もともと親がいない人もいると云うことで、家族とともに弁当を食べる昼の姿もなくなりつつあると云う。教室でいつものように給食を食べるのだ。

少しでも異常があれば病院へ行き、ワクチンを打ち、学校の周りには警備員がつく。それでも現代の子どもたちは校庭の集会で校長の話が少しでも長ければバタバタ倒れる。

少なくとも私が子どもの頃、灼熱の校庭で校長がどれほど話してもよほどのことがない限り、倒れる者はいなかった。大事にすれば弱くなり、放っておけば強くなると云うことか。

しかし、現実的には今の子どもたちの方が幸せと云うこともある。今の子どもたちは家族旅行か、あるいは修学旅行で殆どの者が海外を経験している。一方、私の子どもの頃の大人たちは、海外どころか東京さえ知らぬ儘、生涯を送る人が大半であった。知識量、経験においては今の子どもたちのほうが豊富であろう。さて、今の犬と昔の犬、今の子どもたちと昔の子どもたち、どちらが幸せなのだろう。それはわからない。時代が違うと云うことだろう。だが、ただ一つ、明らかに差があると思うことがある。猫だ。私が思うに、飼い猫は、昔の方がおそらく幸せだった。娘たちが猫が飼いたいと云い出したことがあった。だが、私は珍しくそれを断固拒否した。何故なら、現在の飼い猫は家から出られないから。

我が家で飼われた瞬間からその猫は、我が家の屋内で一生を過ごさなければならないのだ。可哀そうではないか、と思うのだ。エスと同じ頃、我が家ではポコと云うトラ猫がいた。鼠大嫌いな母がどこからかもらってきたのだと思う。

ある日、台所の土間に紐で括りつけられた子猫がいて、私は大喜びしたものだ。この家が自分の家とわかるまで、2、3日紐でくくっておき、餌をあげるのだと云う。

餌の中身はエスと同じ、ぶっかけ飯だ。で、紐を外されたポコはたまらなく自由だった。

エアコンとサッシで虫も入れない現代の住宅と違って、当時の我が家は隙だらけであった。

土間の台所の壁の下には、ポコが通れるほどの穴が開いていたし、障子には一区画だけすだれ状に切っており、そこからポコは出入りしていた。あるときは、自分の仕事である鼠を捕獲し、自慢げに母親に見せに来て、母にキャーキャー云われながら箸でぶたれ、困った顔をしていたポコ。寒い日や雨の日は、炬燵か火鉢の傍で丸まっていたが、基本ははしごで登る私の部屋、屋根裏で寝ていた。朝、起きるとよく魚臭いポコの口が顔の横にあった。裏庭の塀にヒョイと飛び乗り、外へ出ていくポコを、羨ましそうにエスが下から見上げていたものだ。

ポコが大人になった頃、もう彼は村中で知られた存在となっていた。何しろ2軒先のエイちゃんの家でも、村はずれの米屋さんでも、とにかく生まれる子猫と云う子猫が全てトラ猫だったのだ。正に、ポコはハーレムのボスだった。

猫同士の喧嘩か、あるいは野良犬にでもやられたのか、前足から胸にかけて骨が見えるような凄まじいケガをして屋根裏に上がってきたこともあった。あの時、ポコは、屋根裏の私のベッドから少し離れた木箱の隙間に入り込みひたすらじっとしていた。エスの時にも云ったが、当時私の街に獣医などいなかった。だからできることと云えば、傷口に赤チンを塗ってあげることくらいだった。

動けなかったのか、私を信頼していたのか、赤チンを塗っても、ポコは避けようともせず、じっとされるが儘になっていた。で、何も食べない。2日経っても3日経っても何も食べない。ぶっかけ飯を運んでも、普段なら大喜びの牛乳をあげても、何も口にしない。とにかくジッと寝ていた。あの時は、私も子ども心に覚悟をした。ポコは死ぬ、と。

だが、10日ほど経った時だった。朝起きるとポコの顔がすぐ横にあった。で、ニャーニャー騒ぎで、ご飯に牛乳をかけたのをあげるとガツガツすごい勢いで食べだした。傷口を見ると、もう乾いて塞がっている。そして満腹になると、はしごを降り何事もなかったように出かけて行く。こいつは野生のエネルギーを持っている。私は、ポコの生命力のすごさに驚き、そして猫と云う生き物の神秘に感動した。

そんな自由ですごい生命力を持っている猫を家の中限定で飼っていいのか、娘にねだられたとき、私はそう思ったのだ。エスに比べ、ポコは長生きだった。最後に私がポコと接したの

は、私が東京の学校に進み、夏休みに帰郷したときだった。ポコはその時、既に20歳を過ぎていた。足腰も弱り、縁側で胡坐をかいた私の膝の上に登るのがやっとと云う状態だった。

そんなポコに母は常々こう云っていた。「お前な、死ぬときはどっか遠いところでわからんように死ぬんやで」、猫はそう云っておくと、どこかで人に見つからぬよう密かに死ぬのだと云う。ポコは、母の云いつけ通りにしようとしたのだろう。彼は最後の力を振り絞り、必死で我が家から離れようとした。だが、家から遠く離れた山の麓の畑で力尽きた。

ポコが不運だったのは、あまりにも有名なボス猫だったことだ。その畑の持ち主がわざわざ「これ、ポコやろ」と我が家まで運んでくれたのだ。母は私に電話し、そして父は例の墓場までポコを運び、既に先に逝っていたエスの傍らにポコを埋めた。

今、親水公園には、生命が満ち溢れている。天敵のいない人工の川で遊ぶカモたち…サギ…カワセミ…そして飼い主を従えて闊歩する世界各地にルーツを持つ犬たち、自由に振舞っているようだが、去勢されている地域猫たち。

そう云えば、私はポチの去勢にも断固として反対した。飼い犬にとっては、それの方が幸福かもしれない。だが、全ての生命の根本は、子孫繁栄にある。その根本を深く考えず、奪う権利が果たして人間にあるのだろうか。わかっている。おそらく一生交尾の機会のない飼い犬にとっては去勢の方が健康のためにもいいのだろう。

しかし、私はそれでも躊躇するのだ。だって、ポコやエスの自由を見てきたから。

勿論、昔はよかったなどと云うつもりはない。ただ、今の犬・猫の可愛がり方って、常に人間優先のような気がする。犬に服を着せたり、骨が引っかかるからと猫に魚を食べさせなかったり…、生命と云うものは人間が思う以上、力強く神秘的なものだと思う。人間の子どもの教育にしても、ペットとの付き合いにしても、大切なことは彼らの中に潜在している自然の力に敬意を表し、尊重することだと思う。

だから私は今感じる。自然に可能な限り近づけようと、20年前に親水公園をつくった人たちの偉大さと感謝…。苔が生え、水草が育ち、紅葉や桜の木が大きく育つには20年かかったが、お陰でここは慢性腎不全の天邪鬼の心を癒し、虫やカエルたちがやってくる都会の生命の楽園となった。脱帽だ。